

子どもの体育嫌いの原因とその改善方法に関する一考察

A consideration on the cause of children disliking P.E and it's solution

1 K07B145-6 照屋 唯

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 宮内 孝知先生

【研究の目的】

近年、我が国では生涯にわたりスポーツに親しむことで健康・体力の保持増進を図り、日々の生活をより充実したものにしていくとする「生涯スポーツ」の考えが広まってきており、このことの実現には、学校体育や日常生活において子どもたちにスポーツの楽しさを伝え、スポーツに対する強い関心と興味を持たせる必要がある。しかし、子どもの体力低下や運動離れ、体育嫌いなどといった言葉を耳にする機会は多く、その問題は子どもの遊びの変化や学歴社会の日本において更に深刻化してきているように感じる。

本研究では、体育嫌いを生み出す原因や時期、過程等を明らかにし、体育嫌いの子どもの数を減少させるために効果的な教師行動や教材づくり、授業展開方法等の知識を得る手掛かりとすることを目的としている。また、本研究を今後の学校体育の改善・充実に役立てていくことで、体育を好きだ、楽しいと感じる子どもが増え、成人後も積極的にスポーツを楽しもうとする気持ちを持たせることが出来ればと考えている。

【研究の方法】

本研究では、東京学芸大学の立木正教授の『体育嫌いを生み出す原因に関する研究—東京学芸大学学生の意識調査から—』（1997）中の質問紙調査の結果より明らかにされた体育嫌いを生み出す原因について、原因別に実態や問題点を挙げ、体育嫌いの子どもの数を減少させるために必要な体育授業の改善方法や具体的授業展開方法等を既存の著書や論文を参考にしながら考えていく。

【結果と考察】

小学校時代、高等学校時代に対して中学校時代は体育に対して好意的な感情を持っていない割合が高いということ、小学校時代に体育に対して好意的な感情を持つことは、生涯にわたって運動に取り組もうとする「生涯スポーツの実践」に効果的であることが明らかになった。また、運動に対して否定的な感情を持っていた学生は、教師の指導の仕方や教師の評価・評定に対する不満・疑問、

体育授業で受けた精神的・肉体的苦痛の経験の有無の割合が体育に対して好意的感情を持っていた学生と比較して明らかに高いことから、子どもの体育嫌いを引き起こす主な原因は「教師の指導の仕方や人間性」、「種目における体力的苦痛」、「集団行動の中における精神的苦痛」にあることが明らかになった。

「教師における体育嫌い」に関しては、子どもたちは「できる・できない」を区別されることを最も嫌がる傾向にあり、特に学年が高くなるにつれ、その傾向が高くなっていくことが分かった。その他、威圧的な態度をとる教師や、授業づくりに工夫を施さない教師の展開する体育授業も体育嫌いを生起させる原因となっていることも明らかになった。

「種目における体育嫌い」に関しては、運動が不得意・嫌いな子どもたちであっても、教材や教具等、体育授業の工夫次第で運動を楽しませることができると分かった。また、子どもたちが「やってみたい」と思えるような教材を用意し、「ここまでできた」、「やればできる」という自信を持たすことができるような学習過程の工夫を教師が行うことも体育嫌いの子どもの数を生み出さないための一つの方法であることが分かった。

「集団行動における体育嫌い」に関しては、グループ学習やゲームの際のグループ編成において、リーダーの選出に細心の注意を払い、強固な人間関係の構築を念頭におきながらお互いを支え合い、高め合えるグループをつくることを心がけることが重要であるとし、このようにして展開される体育授業は良好な人間関係の構築につながるだけでなく、体育嫌いに陥る子どもの減少に効果的であることが分かった。

本研究を通して、体育嫌いの子どもの数を生み出さないために、教師は子どもたちの性格や運動技能レベル等を把握したうえで教材・教具を工夫し、授業を展開していく必要があり、体育嫌いの生起に教師は深く関わっていることが明らかになった。